

日本史探究の教科書を用いた 授業構想

—— 「時代を通観する問い」を表現するために

太田尾 智之

20

23年度から始まる新科目「日本史探究」は、「歴史総合」をふまえ、「我が国の歴史について、資料を活用し多面的・多角的に考察する力を身に付け、現代の日本の諸課題を見いだして、その解決に向けて生涯にわたって考察、構想することができる資質・能力を育成する科目」であり、以下の4つの大項目から構成されている。

- A 原始・古代の日本と東アジア
- B 中世の日本と世界
- C 近世の日本と世界
- D 近現代の地域・日本と世界

このうち、大項目A～Cは3つの、Dは4つの中項目から成り立ち、それぞれの大項目が一連の学習のまとまりをもつ。A～Dに共通する中項目は以下の通りである(Dのみ「(4)現代の日本の課題の探究」が含まれる)。

- (1) 時代の転換を歴史的環境から考察して生徒が問いを表現する学習
- (2) 資料を活用して仮説を立てる学習
- (3) 主題を設定して、事象の意味や意義、関係性などを考察し、歴史に関わる諸事象の解釈や歴史の画期を表現する学習

2022年4月現在、筆者を含めて「歴史総合」の授業実践に悪戦苦闘・試行錯誤の日々を重ねている教員がたくさんいると思うが、そのなかで「歴史総合」の先にある探究科目の実践計画をも練らなくてはならないという現実がある。

そこで、本稿では新たな「日本史探究」教科書で

ある『詳説日本史』（日探705、以下、教科書）を用いた授業展開案を、教科書編集に関わった一教員として述べてみようと思う。ただし、あらかじめお断りしておきたい点は、本稿に示す授業案が筆者の実践記録・報告ではないということである。新たな教科書を活用した1つの授業構想としてお読みいただければ幸いである。

最初に教科書の作り（内容ではなく構成・形式）を従来版と比較してみると、新版の特徴として次の5点を指摘できる。

- ①判型が大きくなり、注が本文の下から横に移った（図版・地図等がみやすくなった）。
- ②各章冒頭に学習内容に関わる導入文がある。
- ③本文に対応する「Q」（問い）がある。
- ④史資料の読解をうながす「読みといてみよう」の項目がある。
- ⑤章末に「まとめ」の問いが設けられている。

筆者はこれらの特徴のうち、①が授業展開に直接影響を与えることはないものの、②～⑤は「日本史探究」の授業をおこなううえで有効活用が期待できるものと考えている。では、これらの特徴を活かした授業展開とは具体的にどのようなものか、ここでは教科書の第1章「日本文化のあけぼの」の単元を例に考えてみたい。この章は、先にあげた大項目Aの中項目(1)にあたる内容である。すなわち、「黎明期の日本列島と歴史的環境を関連付けて時代の転換を理解し、対外的な環境や交流、中学校社会科歴史的分野での「大観し」で「時代の特色」を考察し表現する学習を踏まえ、時代

の転換について多面的・多角的に考察し、探究に向けた時代を通観する問いを表現する学習を行う」ことが求められる。

単元の指導計画

「日本史探究」は標準3単位(年間105時間)の科目である。実際には増単位してカリキュラムを組む学校が多いかもしれないが、ここでは標準3単位による年間指導計画を想定して、つぎの通り4時間の単元構成を考えてみたい。

第1章「日本文化のあけぼの」

- 1文化の始まり①:旧石器文化(1時間)
- 2文化の始まり②:縄文文化(1時間)
- 3農耕社会の成立①:弥生文化(1時間)
- 4農耕社会の成立②:小国の分立(1時間)

このうち、「時代を通観する問い」を表現する学習活動を含む■4の授業展開案について述べたい。

授業展開案

【導入】「魏志」倭人伝を読む

本単元は旧石器文化から弥生文化の時代を取り扱うため、基本的には考古学の領域である。したがって、■1～■3の授業では遺構や遺物を資料として読み解く学習が中心となり、本時ではじめて中国史書に依拠した史料読解をおこなうことになる。

そこで、導入として中学校社会科歴史的分野でも扱う邪馬台国連合に関する史料(「魏志」倭人伝)を読み解く作業から始めたい。教科書p.19には「読みといてみよう」の項目がおかれ、「3世紀の倭人の社会や風俗をはじめ、邪馬台国連合に関する情報を史料から読み取り、説明してみよう」とある。この史料をそのまま扱ってもよいが、生徒の実態に応じて教員が現代語訳を用意したり、教科書では省略されている内容を含めた史料を準備したりすることも考えられる。

ここでは「魏志」倭人伝のいかなる記述に注目し

たり関心をもったりしたか、ペアワークやグループワークの形式などで自由に話し合うことを通じて、本時の内容に関心をもたせたい。

【展開①】小国の分立

ここではまず、『漢書』地理志と『後漢書』東夷伝の史料からわかることを読み解いていく。前者の史料からは、紀元前1世紀頃に倭人の社会が百余国に分立していたこと、定期的に朝鮮半島の楽浪郡に使者を送ったことが記録されていることを確認する。後者の史料からは、紀元57年に倭の奴国の王の使者が後漢の光武帝から印綬を受けたこと、福岡県志賀島で江戸時代に出土した金印がその際に与えられたものと考えられていること、2世紀には倭国王が「生口百六十人」を献じたことなどを確認する。

ここで、教科書の側注スペースにある「Q▶小国の王はなぜ中国の皇帝に使者を派遣したのだろうか」という問いを活用したい。問いに答えるためのヒントは教科書にあるが、その内容をふまえつつ柔軟な発想で考えるよう生徒にうながしたいところである。たとえば、教科書の記述をヒントに「銅鏡や鉄器などの先進的な文物を入手するため」という解答が出ることが予測されるが、そこからさらに「銅鏡や鉄器を倭人がどのように使ったのか」と問いかけることで、既習事項をもとに考えを深めさせることが可能となる。あるいは「ほかの小国より倭国内での立場を高めようとした」という解答も当然ありうるが、そこからさらに「倭国内で小国の対立がおこっていたのはなぜか」「小国の対立があったことを示す考古学的証拠は何か」など、ここでも既習事項をもとにして問いをふくらませていくことが可能である。側注の「Q」を大いに活用したい。

【展開②】邪馬台国連合

つづいて、授業の導入で扱った「魏志」倭人伝の話題に移る。同史料に見える邪馬台国連合や女王卑弥呼については、生徒にたいへん馴染みのある

ものと予測されるため、まずは史料から読み取れる基本的な情報を改めて整理したい。授業の冒頭で生徒が読み解いた内容をふまえた展開が理想である。そして邪馬台国の所在地をめぐる議論がなぜ重要な意義を有するのかを解説し、近畿説と九州説のそれぞれについて取り上げたうえで、生徒の意見を聞いてみたいところである。

また、教科書には卑弥呼の死後の動向に触れたあと、「以後約150年間、倭国に関する記載は中国の歴史書から姿を消している」(p.19)との記述がある。このことについて、なぜ倭国の記録が消えてしまうのか、生徒に考えさせてみるのもよいだろう。

【まとめ】「時代を通観する問い」の表現

最後に単元全体の振り返りに入る。ここでは、「日本史探究」の重要不可欠な要素である「時代を通観する問い」を生徒が表現するための指導を実践しなければならない。

そこで活用したいのが、教科書の章末におかれている「まとめ」である。以下は、第1章のまとめである。

問1 旧石器時代から縄文・弥生時代への変化で、人々の生活とくに大きな影響を与えたものは何だろうか。

問2 弥生時代には、朝鮮半島や中国大陸などとの関係が深まるが、それは人々の暮らしや社会にどのような結果をもたらしたのだろうか。

問3 社会の変化や、政治的なまとまりの形成・展開、国際関係の変化などの観点から、原始・古代の特徴について、問いを表現してみよう。

問1と問2は、この単元で学んだ内容をふまえた問いかけになっているので、ペアワークないしはグループワークの形式で取り組むことが可能であると思う。

問題は問3である。「原始・古代の特徴について、

問いを表現してみよう」という問いかけである以上、少なくとも既習事項をまとめることを意味しない。これから学んでいく時代(具体的には古墳時代～平安時代)の特徴について問いを立てるのであるから、これは問1・問2とは性質がまったく異なる。したがって、既習事項をもとにして生徒に考えをうながそうとしても、うまくいかないのではないかと思われる。

それでは、どのような指導の工夫が現実的であろうか。ここで筆者は、本教科書の特徴として先に掲げた①～⑤の項目のうちの②(各章冒頭にある学習内容に関わる導入文)に着目してはどうかと考えている。すなわち、原始・古代の範囲に該当する第2章～第4章の冒頭の文章を参照することで、「時代を通観する問い」を表現する手がかりを生徒がつかみやすくなるのではないかと期待するのである。以下、実際に各章の冒頭文を掲げてみることにしよう。

第2章:日本列島では、政治連合が形成されるとともに、古墳がつくられるようになっていった。大和地方を中心としたヤマト政権は、大陸とも関わりながら、大王を中心とする集権的な国家形成を目指すようになる。ヤマト政権と古墳にはどのような関係があるのだろうか。また、ヤマト政権は大陸とどのような交渉をもったのだろうか。(p.24)

第3章:律令国家は中国の制度を模倣して国家の枠組みをつくったが、一方で実際に機能させるために前の時代のあり方も受け継いだ。それはどのようなところに現れているだろうか。そして、律令国家は支配を浸透させ、天平文化が生まれるが、どのように中国と交流したのだろうか。また、なぜ日本的な政治のあり方が生まれてくるのだろうか。(p.37)

第4章:9世紀後半になると、摂政・関白という新しい地位が生まれ、やがて国風文化が花開いた。こうした状況が生まれた背景には、何があるだろうか。また、課税の対象は人から土地になり、受領たちが強力な支配を展開し

て、摂関政治を財政的に支えたが、その結果、地方ではどのような変化がおこっただろうか。(p.62)

時代を通観するという知的営為はたいへん難しく感じられるが、学習指導要領解説では「時代を通観する問い」を表現する際に、「中学校社会科歴史的分野での既習事項などを活用」することが明記されている。したがって、生徒の実態にあわせた教員の支援が必要であることは当然だが、日本史の大まかな展開を生徒が多少なりともイメージできているとするなら、上で引用した教科書の各章の導入文を上手に活用できるのではないだろうか。

たとえば、第2章の導入文を参考に、「大王を中心とする集権国家はどのような過程を経て形成されていったのだろうか」「中国大陸や朝鮮半島との関係はどのように推移していったのだろうか」などの問いを表現することが考えられる。あるいは、このような問いを教員が先に例示し、第3章や第4章の導入文をヒントにして生徒が自分なりの問いを表現することができるようにうながすことは、それほど困難ではないように思われるが、いかがであろうか。

また、「歴史総合」の授業を通じて問いを表現する学習に慣れている生徒であれば、ここに述べた手法を用いる必要は必ずしもないであろうし、むしろその方が望ましいとすらいえる。

おわりに

本稿では、筆者が現時点で考える新科目「日本史探究」の授業展開案として、新たな教科書の特徴を活かした構成を考えてみた。

ただし、冒頭にも述べた通り、大項目A～Dの学習はそれぞれ中項目(1)～(3)の一連のつながりを通して学習を深めていく構造になっている。したがって、本稿で触れた「時代を通観する問い」

を生徒が表現することを目的とした授業展開案は、当然それのみで完結させるというわけにいかない。

この授業の後に中項目(2)の内容、すなわち「時代の転換を扱った中項目(1)を踏まえ、対象となる時代の特色について多面的・多角的に考察し、生徒が仮説を表現し、続く(4)の学習の視点を形成すること」が求められる。さらに中項目(3)の内容、すなわち「中項目(1)及び(2)で表現された時代を通観する問いや仮説を踏まえ、資料を活用して、各時代の歴史の展開について、主題を設定し、事象の意味や意義、関係性などを考察し、歴史に関わる諸事象の解釈や歴史の画期などを根拠を示して表現する」学習が必要なのである。

本来であれば、本稿において一連の学習内容を示した指導案を提起すべきであることは重々承知している。しかし、紙幅の関係もさることながら、何より筆者の力量不足から現時点で全体像を提案できる状況にないのが現実である。

また、探究科目における観点別評価も今後の大きな課題となるだろう。これについては、たとえば先述した單元ごとの振り返りの時間に小レポートを課すなどして、多面的・多角的な評価を実践していくことが考えられるが、その具体的な手法については筆者自身も模索中である。これらの重要かつ喫緊の課題にどのように立ち向かうかについては、筆者みずからが研究と実践を重ねることで他日を期したいと考えている。

主要参考文献

文部科学省「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 地理歴史編」(東洋館出版社、2019年3月)

(おたお・ともゆき/東京都立国立高等学校教諭)